

## 炭素 14 濃度測定による太陽活動極小期におけるシュワーベサイクルの特性の研究

## Variation of Solar '11-year cycle' during the grand solar minima

# 永治 健太郎 [1]; 北澤 恭平 [2]; 増田 公明 [3]; 中村 俊夫 [4]; 宮原 ひろ子 [5]; 松崎 浩之 [6]

# Kentaro Nagaya[1]; kyouhei Kitazawa[2]; Kimiaki Masuda[3]; Toshio Nakamura[4]; Hiroko Miyahara[5]; Hiroyuki Matsuzaki[6]

[1] 名大・STE; [2] 名大・STE; [3] 名大 STE 研; [4] 名古屋大・年測セ; [5] 東大理 地球惑星; [6] 東大・工

[1] STE, Nagoya Univ.; [2] STE, Nagoya Univ.; [3] STEL, Nagoya Univ.; [4] CCR, Nagoya Univ.; [5] Dept. Earth & Planet. Sci., Univ. Tokyo; [6] MALT, Univ. Tokyo

我々のグループでは、樹木年輪に含まれる宇宙線起源放射性炭素の濃度を測定することで過去の太陽活動の変動を調べている。

我々はこれまでにマウンダー極小期、シュペーラー極小期、紀元前 4 世紀の太陽活動極小期における  $^{14}\text{C}$  濃度の測定を行なっている。

本講演では、これまでに測定を行なった 3 つの極小期におけるシュワーベサイクルの特性について、新たに加わったデータを含めて議論を行う。